

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 167号

平成28年3月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (16)

どういう人間である (be) かが大切

マタイ伝 28 章 16 以下…。復活の信仰。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」真理。我々はどのような仕事をするかということも必要であるが、どういう人間であるかの方が大切である。to do よりも to be の方が大切である。

キリストは 30 歳まで大工の仕事をしていた (to do)。しかしキリストは神の子 (to be) であられた。我々は be という資格を得る。それが救いである。どんな仕事をしてもいいが聖書を読め!! そして神の子としてもらえ!! … 社会に貢献しなくてもその人に接したらうるわしくなるようなそういう人になれ。小林先生は be の人であった。信仰とは be の問題である。do の問題にあらず。

(昭和 46 年 5 月 7 日 金曜会)

## 先生と生徒がいる

貧しい経験より。日曜礼拝は白山の小石川教会。そして内村集会へ。卒業後も2年間通う。足掛け8年。先生の講義は徹頭徹尾聖書の話。門は新生、新生は聖霊による。ではいかにして。ペンテコステ、ダマスコ途中のポーロに及ぶごとく俄然たることもあらん。が我々は終生徐々に下ると内村先生曰く。

キリスト者の集まり、これがいる。一人だけでは不十分。先生、生徒がいるのだ。どうしてもきわめ手は聖書！特にパウロの手紙がいい。例えばガラテヤ書の前の4章と後の3章。ポイントは信と行。これに宗教はおさまる。もとへ、聖霊による也。人智によらずそれを越える。忍耐いるぞ。

僕が気付いたのは「神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者とによってあかしされて、現わされた」（ロマ書3章21）→「律法と無関係に」聖書でイエス・キリストの霊に触れること。内村先生の説明を通してくる。聖書の文句にかくれている。正に事実なり。自分自身で分かる人は稀ならん。

(昭和46年6月25日 金曜会)

## イエスをどう信ずるか

イエスを単に人間生活の手本としてその真似をしよう、従おうと思ってもそれは無理で、それより先にイエスをキリストと信ずることが必要である。イエスをどう信ずるかということを最も詳しく示したものがパウロのロマ書である。そういう意味においてわれわれはキリスト教の元祖であるペテロ、ヨハネ、パウロたちをまず学ばねばならない。

ロマ書をこう定義してみた。永遠の生命を与える書である。この永遠の生命は、現世において如何なる境遇をも乗越えることができる。死後は臨終において主の来迎を戴き、復活して神の国と人と共に永遠に生きるということである。ロマ書を読んで聖霊を与えられて初めてイエスの行いを「真似」ることができるのである。ロマ書を終生身から離してはならない。

(昭和 46 年 9 月 10 日 金曜日)

## ストレプトマイシンのたとえ

救いが行ないによるのではないのと同じように我々の心の状態の変化、信仰的努力にあるのではない。上からあらわされた救いを我々が受け取るかどうかにかかっている。結核菌を殺すのはストレプトマイシンそのものであってそれ以外の何物でもない。これを受け取れることを信仰によって救われるというのである。

(昭和 46 年 9 月 10 日金曜日)

## ロマ書の意義

イエスは「あなた方は心を騒がせないがよい。神を信じ、また私を信じなさい」と言われた。しかしイエス御自身は、いかにしてイエスを信ずべきかをお示しになることは出来なかった。これは弟子にゆだねたもうた。ゆえにイエスは「我々のつかわす者を信ずる者は我を信ずるなり」と仰せになった。これゆえいかにして、イエスを信ずべきかについては12使徒及びパウロによるしか方法がない。しかしこれをも最も詳しく、明瞭に教えてくれたのはパウロである。そしてロマ書においてであった。それゆえにロマ書はキリスト教信仰を教ゆる唯一無二の書となったとって過言ではあるまい。

ヨハネ伝では、イエスを神の子キリストと信ずれば永遠の生命をうると教えた。又、神はその生み給える一人子を賜ったほどに世を愛し給えり、それは御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の生命をうるためであると教えている。しかしイエスを神の子と信じるとは、イエスのどこをどういうふうに信じるのかは、パウロのロマ書3章21～26に説明されているのである。かくしてロマ書は人類の歴史において、我らの知る如き大なる感化を与えた。

(昭和46年10月8日 金曜会)

## 終生ロマ書を手離すな

私は幸に同志会在会中に内村先生のロマ書の講義を聴くことができた。先生の講義は約2年間かかった。大正10年（1921年）1月より大正11年10月までであった。丁度50年以前に当る。そのとき学んだ信仰が私の信仰となっている。私は自分の教会で1961～62年とロマ書の講義をしたが再び1971年正月よりロマ書の講義をしている。若し健康を与えられたら72年に講義を終え、1981～1982年には3度ロマ書の講義を自分の教会でしたいと思っている。私はロマ書を定義して、

「ロマ書とは現世においては、如何なる境遇をものりこえることができ、来世に於いては、臨終には主の来迎をこうむり、復活して永遠に主とともに生きることができるところの永遠の生命を受くるの書なり」といっている。諸兄も終生ロマ書をお手離しにならぬことを祈る。

（昭和46年10月8日 金曜会続き）

## キリスト教の土台は復活のイエス・キリスト

今の石館先生のお話し、“Boys, be ambitious like this old man”  
と言えば魂が入る。石館先生の復活に関するクリスチャン新聞の記事を紹介したい。今春の石館先生宅での夕食会で、先生はキリスト教の土台は復活のイエス・キリストだ。つくづく思うと言われた。私は全く同感だと言った。

キリスト教の本質について石館先生がはっきり語られるのを聞いた。“誰でもキリストに在ればその人は新しく作られた人である。アダムの死の体が復活の生命にあずかるというのである。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストに会ってすべての人が生かされるのである」(コリント前書 15 章 22)

現代人はこれを受け入れ難くこれをキリスト教会は説かぬ。贖い、この世の罪は説くのに。ペテロ達 12 名の田舎の無学な弟子を立ち上がらせたものは何か、復活である。人の栄枯盛衰は空しい。この世の人間愛、崇高な主義もそのまま人と共に消えるのでは空しい。キリストが我々と同じ姿で語り行動して、死をも味わった。自ら十字架にかけられ神に人の罪を謝罪した。それだけではキリスト者は最もつまらぬ。永遠の命を得、復活したという事実があって初めて意

義がある。

石館先生 71 歳、内村鑑三は 50 余歳で娘のルツ子さんが亡くなった時ルツ子さん万歳と叫び、矢内原忠雄先生はキリスト教はすごいものだと言ったと言う。私も今やっとこのことが分かった。聖霊（終生徐々に下る一内村）が下った時こうしたことは分かるであろう。こうした時の諸君一人一人に来ることを切に祈ります。忍耐を持って待っていただきたい。

(昭和 47 年 4 月 21 日 金曜会 署名式)



## 恵心僧都源信

恵心僧都源信に関して。源信が日本民族に対して如何なる貢献をしたか。彼は天台宗の僧である。法然、親鸞に大きな影響を与えた。地獄極楽の思想を最もはっきりと教えた。人生はこの世だけではない。源信は日本の仏教史から除くことは出来ない。日本思想史にも出てくる。何の宗も起さなかった。

源信のような考えを持っている人が本当にキリスト教を理解すると思われる。ロマ書の中心はキリストの復活である。これは来世のことを書いている。ロマ書 8 章は聖書の輝点である。復活の信仰の分かる人は源信のような考え方を持っている人ではないか。パウロの持っているのは復活の力である。

(昭和 47 年 6 月 9 日 金曜会)

## 聖書の勉強

これから毎回出席ごとに聖書の話をしていきます。ポーロの手紙になら  
ってです。初め教義、あと勧め。地味だけど若い時の聖書の勉強。  
高校から大学の5年間、内村先生の聴講。特徴は聖書の講義ばかり。  
私は石館兄弟のお陰で教会を建ててもらい、少しく素人でも分  
かってきた。聖書はキリスト教のすべてではないがエレメントだ。  
この頃の牧師、信徒共に聖書を読まん。ワタクシチャンが多い。

「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」(ロマ書 10 章 13)  
を 50 年間何百回も読んだが、若い諸君は教えてもらうことが必要で  
ある。

(昭和 47 年 6 月 23 日 金曜会)